

目 次

新潟大学医歯学総合病院 診療科(部)情報	43
循環器内科	44
血液・内分泌・代謝内科	44
腎・膠原病内科	45
呼吸器・感染症内科	45
消化器内科	46
脳神経内科	46
腫瘍内科	47
精神科	47
小児科	48
消化器外科、乳腺・内分泌外科	48
心臓血管外科、呼吸器外科	49
整形外科	49
形成外科	50
小児外科	50
脳神経外科	51
皮膚科	51
泌尿器科	52
眼科	52
耳鼻咽喉科・頭頸部外科	53
産科婦人科	53
放射線科	54
麻酔科	54
高次救命災害治療センター	55
リハビリテーション科	55
病理部	56
血液浄化療法部	56
医科総合診療部	57

新潟大学医歯学総合病院 診療科(部)情報

新潟大学医歯学総合病院 研修可能診療科一覧

診療科等	内科必修 (24週)	外科必修 (4週)	救急部門 必修*1 (12週)	精神科必修 (4週)	産婦人科 必修 (4週)	小児科必修 (4週)	選択研修	受入期間	同時受入 可能数
循環器内科	○						○	4週以上	8名
血液・内分泌・代謝内科	○						○	4週以上	8名
腎・膠原病内科	○						○	4週以上	6名
呼吸器・感染症内科	○						○	4週以上	6名
消化器内科	○						○	4週以上	8名
脳神経内科	○						○	4週以上	8名
腫瘍内科	○						○	4週以上	1名
精神科				○			○	4週以上	5名
小児科						○	○	4週以上	5名
消化器外科、 乳腺・内分泌外科		○					○	4週以上	6名
心臓血管外科、 呼吸器外科		○					○	4週以上	5名
整形外科		○					○	4週以上	5名
形成外科							○	4週以上	2名
小児外科		○					○	4週以上	2名
脳神経外科		○					○	4週以上	4名
皮膚科							○	4週以上	3名
泌尿器科		○					○	4週以上	3名
眼科							○	4週以上	5名
耳鼻咽喉科・頭頸部外科		○					○	4週以上	5名
産科婦人科					○		○	6週以上	5名
放射線科							○	4週以上	3名
麻酔科			○				○	4週以上	5名
高次救命災害治療センターア			○				○	4週以上	6名
リハビリテーション科							○	4週以上	1名(他科と 同時可)
病理部							○	8週以上	2名
血液浄化療法部							○	4週以上	2名(他科と 同時可)
医科総合診療部							○	4週以上	2名(他科と 同時可)

*上記の科目に適用となる診療科は本院での研修のみです。協力型病院では研修可能診療科は異なりますので、各病院ページを参照して下さい。

※上記の科目は全て選択研修として選択できます。

*¹: 本院での救急部門研修(必修)は、高次救命災害治療センターでの研修期間を8週、麻酔科での研修期間を4週とします。

循環器内科

診療科目：循環器内科

診療科担当研修責任者名：尾崎 和幸（循環器内科 准教授）
診療科連絡先担当者名：柳川 貴央（循環器内科総括医長）

連絡先：takao-ya@med.niigata-u.ac.jp

新臨床研修医指導実績：平成16年度：26人。17年度：28人。18年度：25人。19年度：10人。20年度：12人。21年度：17人。22年度：15人。
23年度：17人。24年度：11人。（第一内科実績）25年度：5人。26年度：7人。27年度：8人。28年度：7人。
29年度：7人。30年度：13人。令和元年度：15人。

受入期間：1ヶ月以上（相談可）

同時受け入れ可能数：8人以内

◇◇◇学会認定専門医数◇◇◇

総合内科専門医19人、循環器専門医21人、日本心血管インターベンション学会専門医2人、日本不整脈心電学会不整脈専門医4人、高血圧専門医1人、心臓リハビリテーション指導医4人、動脈硬化専門医1人、超音波学会専門医2人、救急専門医1人

診療科の概説・特徴

循環器内科教室は平成24年9月に旧第一内科が分野別を新たに編成して誕生した新しい教室である。高度で洗練された循環器内科診療をめざす医師が集い、修練を積んでいる。高血圧、糖尿病、高脂血症など需要の多い疾患から、心不全、心筋梗塞、不整脈などの救急治療はもちろん、難治性疾患の壁を突破するためにより高度な医療とその基礎となる研究に取り組んでいる。現在、新潟県および近県および関東の関連病院と患者診療で連携し、また基礎研究では世界的にその成果を発揮している。虚血性心血管疾患、心不全、不整脈疾患を診療する3グループがあり、それぞれが連携して治療、臨床研究および基礎研究を行っている。平成21年より救急外来体制が再編成され、急性心筋梗塞、急性心不全、致死性不整脈による搬送がより増加している。年間250件以上の冠動脈カテーテル治療、50件以上の血管内治療および構造的心疾患に対するカテーテル治療、200件以上の不整脈カテーテル心筋焼灼術が行われ、埋め込み型心臓デバイスの埋め込み数でも全国有数である。また、重症心不全や肺高血圧症の検査・治療についても新潟県の拠点となっている。再生医療分野の基礎研究、不整脈分野の基礎研究から臨床応用を行っている。基礎研究分野においては、遺伝性不整脈、再分極異常、J波症候群や心筋炎の研究で世界をリードしてきたのに加え、新体制では、老化および細胞老化と代謝障害など心疾患を含めた全身疾患との関連について世界的な研究を行い、今後の臨床への発展に向けて日夜努力している。

診療科研修の特徴等

- ①前期研修では、内科医としての全身診療技量を身につけることを最重要に考える。循環器疾患については診断から治療、緊急対応、そしてその土台となる基礎的背景までの専門的な研修を行い、生涯の医師としての診療と研鑽に役立つ研修を行っている。
- ②病棟では指導医と若手循環器内科医によるチーム主治医制をとっている。研修医はその一員として主体的に診療に関わり、循環器疾患一例一例に対してきめ細かな指導を受けることで、質の高い研修が可能である。
- ③循環器疾患における検査手技について：
救急診療において必須である12導心電図および超音波でのスクリーニング検査など習得が可能であり、臨床医としての基本的な質を高めることができる。心臓カテーテル検査・冠動脈形成術、電気生理検査・カテーテル心筋焼灼術、ペースメーカー・植込み型除細動器の植込みおよび管理などを経験することが可能である。
- ④急性心筋梗塞、急性心不全、発作性不整脈など救急処置を必要とする循環器疾患への対応も重要な研修項目であり、救急部との連携のもと研修でき、また集中治療室での全身管理の基礎を学ぶこともできる。
- ⑤一方で近年高齢化により増加の一途をたどる、慢性心不全患者に対するリハビリを含めた包括的医療など、一般内科へも通ずる総合的な管理も実践できる。
- ⑥検討会を通してプレゼンテーション能力を養うとともに、臨床研究の立案など探求的思考の習得を目指して、教育を行っている。

血液・内分泌・代謝内科

診療科目：血液・内分泌・代謝内科

診療科担当研修責任者名：曾根 博仁（血液・内分泌・代謝内科教授）
診療科連絡先担当者名：瀧澤 淳（血液内科）
山田 貴穂（内分泌・代謝内科）

連絡先：juntaki@med.niigata-u.ac.jp（血液内科）
t-yamada@med.niigata-u.ac.jp
(内分泌代謝内科)

新臨床研修医指導実績：平成16年度：26人。17年度：28人。18年度：25人。19年度：10人。20年度：12人。21年度：17人。22年度：15人。
23年度：17人。24年度：11人。（第一内科実績）25年度：10人。26年度：9人。27年度：12人。28年度：9人。
29年度：7人。30年度：21人。令和元年度：28人。

受入期間：1ヶ月以上（ただし、1年目研修医は2ヶ月以上）

同時受け入れ可能数：8人以内

◇◇◇学会認定専門医数◇◇◇

総合内科専門医11人、血液専門医11人、糖尿病専門医10人、内分泌代謝専門医5人、がん薬物療法専門医2人、輸血・細胞治療学会認定医4人、がん治療認定医7人、日本造血細胞移植学会認定医3人、動脈硬化学会専門医2人

◇◇◇学会認定専門医数◇◇◇

内科学会指導医13人、糖尿病学会指導医2人、内分泌学会指導医2人、血液指導医7人

診療科の概説・特徴

全国的に内科の臓器別細分化が進む中、血液・内分泌・代謝分野を含む当科は、急性から慢性、重症から軽症、若年から老年、腫瘍から動脈硬化・生活習慣病までを幅広くカバーできる「総合内科」のアプローチを重視している。そして大学病院と市中病院の良い点を組み合わせたフレキシブルな研修プログラムにより、最新の知見・技術と豊富で多彩な症例経験を兼ね備えた国際的に通用する専門医を輩出してきた。血液学は臨床腫瘍学の最先端として進歩し続けている分野であり、内分泌・代謝学は患者が最も多く、健康寿命延伸実現の先頭を走る分野で、共に極めて国民のニードが高く、一生をかけるに値する分野である。

古い大学医局のイメージとはかけ離れた温かい教育的雰囲気は、患者さんに寄り添う人間性豊かな専門医養成のために、当科が最も大事にしている特長の一つで、学生・研修医教育には定評がある。

研究についても、教科書やガイドラインを書き換えるような臨床研究から、難治疾患の新治療法に直結する基礎研究まで、いずれも国際レベルで幅広く展開されており、各人の興味と希望によりいつでも経験可能である。

診療科研修の特徴等

前期研修では、総合内科専門医をターゲットに当科両分野に関する研修も行う。両分野とも、一臓器でなく環境・心理も含めて全人的に診る能力が要求されるため、内科医としての基礎を身につけるのに最適な分野であり、一例ずつ丁寧な指導を受けながら余裕を持った「考える内科」の研修ができる。選択科目研修では希望により、両分野同時あるいは各分野に絞った研修もいずれも可能である。意欲的な研修医には学会発表も推奨し、さらに高度な内科的思考を身につける指導も行っている。

後期研修プログラムは、希望の将来像（開業、市中病院勤務、大学教員など）あるいは様々な個人的事情（出産・育児、介護、留学など）に応じ個人別かつ柔軟に組まれるのが当科の特長である。血液班または内分泌・代謝班のいずれかに属してそれぞれの専門医を目指すことでも、両分野の専門医を同時に取得して（ダブルボード）、現場医療の最前線で多面的に活躍することも可能である。

血液学については、最新技術を駆使した臨床腫瘍学と移植医療が、内分泌・代謝学については、内分泌疾患全般に加え、糖尿病、脂質異常症や肥満、高血圧も含めた生活習慣病全般的予防治療がそれぞれ習得できる。

腎・膠原病内科

診療科目：一般内科、腎臓、糖尿病、リウマチ・膠原病	
診療科担当研修責任者名：成田 一衛（腎・膠原病内科教授） 診療科連絡先担当者名：中枝 武司（腎・膠原病内科総括医長）	連絡先：nakatsue@med.niigata-u.ac.jp
新臨床研修医指導実績：平成16年度：32人。17年度：38人。18年度：20人。19年度：19人。20年度：16人。21年度：23人。22年度：17人。 23年度：20人。24年度：16人。25年度：19人。26年度：16人。27年度：10人。28年度：17人。29年度：17人。 30年度：20人。令和元年度：21人。	
受入期間：1ヶ月以上（原則）	同時受け入れ可能数：6人
◇◇◇学会認定専門医数◇◇◇	
内科学会専門医18人、腎臓専門医16人、透析専門医9人、糖尿病専門医3人、リウマチ専門医6人、老年医学専門医1人、高血圧専門医1人	
◇◇◇学会認定指導医数◇◇◇	
内科学会指導医13人、腎臓学会指導医10人、透析学会指導医6人、糖尿病指導医2人、リウマチ指導医4人、老年医学指導医1人、高血圧指導医1人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴等
新潟大学の前身、新潟医科大学創設からの伝統を受け継ぐ内科学講座である。高度医療技術を用いて専門領域の診療を担当するとともに、内科全体を広い視野で把握し、その上で専門性を発揮してゆくという機運に満ちている。担当診療科目の臨床／教育／研究の3分野を担当、なかでも臨床を最優先と捉えており、優れた臨床医を目指すことが当科のモットーである。腎臓病学領域では、日本で初めて腎生検と透析療法を実施した歴史を持つ。腎生検組織は日本でトップクラスのリソースを有し、腎組織病理から腎移植までの全般にわたる診療を行なう。リウマチ膠原病疾患については、新潟県内の中心施設としての役割を果たしている。	当科での前記研修目標は、1) 病棟医として患者を診察し、病態を正確に把握すること、2) 患者の状態を正確に上級医に伝え、鑑別診断を挙げ検査方法を決定し、可能なものは自分で実施すること、3) 診断確定後の治療方針を自分自身で決定し、上級医の指導の下で実施することである。当科では腎・膠原病を担当する3つの診療チーム（A, B, C）があり、いずれかのチームに所属する。チームは後期研修医、大学院生、専門医など5-7人から成り、チーム内ミーティングを頻繁に行い、意思疎通を図っている。 当科では、全身にわたる症候から急性期、慢性期疾患を扱い、内科の中でも全身管理を要求される。医師としては必ず遭遇する common disease から内科専門医資格として経験が要求される希少疾患まで幅の広い診療を経験し、各疾患毎の症例検討会に参加することで、内科全般にわたる鑑別診断やプレゼンテーション能力を養うことが可能である。毎週の教授回診では当科のみならず、他科併診の患者を回診し、臓器連関や全身管理の方法を学ぶ。選択科目研修では、将来、腎臓・糖尿病・リウマチ膠原病などの専門医を希望する場合は、より早期に専門医を取得するための準備期間になり、他科を専攻することを決めている場合でも内科診療の基本や体液管理・輸液療法の習得など一定期間の内科研修を行う場としても有用である。

呼吸器・感染症内科

診療科目：一般内科、呼吸器、腫瘍、アレルギー、膠原病、感染症、心身症	
診療科担当研修責任者名：菊地 利明（呼吸器・感染症内科学教授） 診療科連絡先担当者名：大嶋 康義（呼吸器・感染症内科総括医長）	連絡先：kokyukansen@med.niigata-u.ac.jp
新臨床研修医指導実績：平成16年度：32人。17年度：38人。18年度：20人。19年度：19人。20年度：16人。21年度：23人。22年度：17人。 23年度：20人。24年度：16人。25年度：19人。26年度：18人。27年度：12人。28年度：17人。29年度：10人。 30年度：20人。令和元年度：22人。	
受入期間：1ヶ月以上（原則）	同時受け入れ可能数：6人
◇◇◇学会認定専門医数◇◇◇	
内科学会専門医16人、呼吸器学会専門医13人、アレルギー学会専門医4人、感染症学会専門医6人、気管支鏡専門医3人、心身医学会専門医2人、がん治療認定医4人	
◇◇◇学会認定指導医数◇◇◇	
内科指導医11人、呼吸器学会指導医7人、アレルギー学会指導医2人、感染症学会指導医4人、気管支鏡指導医1人、心身医学会指導医2人、がん治療指導医1人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴等
新潟大学の前身、新潟医科大学創設からの伝統を受け継ぐ内科学講座である。高度医療技術を用いて専門領域の診療を担当するとともに、内科全体を広い視野で把握し、その上で専門性を発揮してゆくという機運に満ちている。臨床能力の優れた医師の育成はもちろん、臨床的疑問を研究者としての視点でもとらえ、基礎研究や臨床研究の手法で解決できる physician scientist の育成も行っている。	当科での前記研修目標は、1) 病棟医として患者を診察し、病態を正確に把握すること、2) 患者の状態を正確に上級医に伝え、鑑別診断を挙げ検査方法を決定し、可能なものは自分で実施すること、3) 診断確定後の治療方針を自分自身で決定し、上級医の指導の基で実施することである。当科では2つの診療チームがあり、いずれかのチームに所属することを原則としている。呼吸器・感染症の様々な疾患に対応できるよう約10名から成るチームでミーティングを頻繁に行い、意思疎通を図っている。 どこの科に進んでも必ず遭遇する common disease から内科専門医資格として経験が要求される間質性肺炎などの希少疾患まで幅の広い診療にあたってもらう。専門分野の症例検討会に参加することで、特殊疾患の診かたやプレゼンテーション能力を養うことができる。週1回の教授回診では当科入院の患者のみならず、他科との兼科（併診）の患者の回診を行う。 選択科目研修では、将来、呼吸器・感染症専門医を希望する場合は、より早期に専門医を取得するための準備期間になるであろう。また、他科を専攻することを決めている場合でも画像の読みを学習するなど一定期間の内科研修を行う場としても有用である。

消化器内科

診療科目：消化器内科

診療科担当研修責任者名：寺井 崇二（消化器内科教授）
診療科連絡先担当者名：水野 研一（消化器内科総括医長）
連絡先：kmizuno@med.niigata-u.ac.jp

新臨床研修医指導実績：平成16年度：25人。17年度：29人。18年度：15人。19年度：12人。20年度：8人。21年度：14人。22年度：12人。
23年度：10人。24年度：12人。25年度：14人。26年度：8人。27年度：14人。28年度：9人。29年度：14人。
30年度：11人。令和元年度：13人。

受入期間：1ヶ月以上

同時受け入れ可能数：8人以内

◆◆◆学会認定専門医数◆◆◆

内科学会認定内科医35人、総合内科専門医13人、消化器病学会専門医20人、消化器内視鏡学会専門医16人、肝臓学会専門医15人、がん治療認定医7人、肥満症専門医1人、再生医療認定医2人、カプセル内視鏡認定医1人

◆◆◆学会認定指導医数◆◆◆

内科学会指導医16人、消化器病学会指導医7人、肝臓学会指導医5人、内視鏡学会指導医6人、がん治療指導医1人、肥満症指導医1人、カプセル内視鏡指導医1人

診療科の概説・特徴

当診療科は昭和42年に開設され、平成29年には開設50周年を迎えました。市田文弘初代教授のもと、我が国における肝臓病学の先駆的な臨床研究を行い、多くの優れた人材を輩出しました。さらには、朝倉均第二代教授、青柳豊第三代教授のもとで診療・研究において大きな業績を残し、現在、寺井崇二第四代教授の指導の下で総合消化器内科医の育成をめざし、消化器疾患全般に渡って高度な専門的医療を実践しています。当科は、消化器内科ならびに内科全般の考え方と基本手技を修得するとともに、患者様の視点に立ったチーム医療を基本理念としています。年々増加する消化器疾患に対して、高度な知識と技術を身につけた消化器内科医の育成は社会的急務とされており、県内外の消化器専門医療施設と密接に連携を取りながら、消化器内科医の研修を行っています。

診療科研修の特徴等

限りある研修期間の中で、主要な肝、胆膵、消化管の病気を偏りなく担当できるように配慮しています。5～6人の医師で構成される主治医グループの一員となりますが、卒後4～6年目の比較的若い上級医の直接指導のもとで、研修を行います。当科には、古い封建的な医局体質は全くなく、アットホームな気風に溢れているため、教授をはじめとして、どの上級医、指導医に相談しても、熱心に指導してもらえます。関連病院から紹介される診断治療の困難症例に対して、文献を調べ、検討会で議論を重ねることは、当科も含め大学病院での研修の特徴です。しかし、近年は、急性腹症例などの救急搬送や緊急入院症例も多く、救急医療の実際を学ぶことも十分可能です。また、消化器疾患診療における基本的な検査手技（上部消化管内視鏡検査や腹部超音波検査など）の実技研修を受ける事が出来ます。さらに、高度な診断治療手技である腹部超音波下の穿刺治療、血管造影、各種内視鏡治療などについては、診断や治療方針を決定する各種検討会に参加しその基本を学び、指導医についてその介助ができる事を到達目標としています。

脳神経内科

診療科目：脳神経内科

診療科担当研修責任者名：小野寺 理（脳神経内科教授）
診療科連絡先担当者名：石原 智彦（脳神経内科総括医長）
連絡先：ishihiara@bri.niigata-u.ac.jp

新臨床研修医指導実績：平成16年度：17人。17年度：18人。18年度：13人。19年度：9人。20年度：9人。21年度：11人。22年度：8人。
23年度：6人。24年度：6人。25年度：7人。26年度：3人。27年度：4人。28年度：2人。29年度：6人。
30年度：18人。令和元年度：22人。

受入期間：1ヶ月以上

同時受け入れ可能数：8人以内

◆◆◆学会認定専門医数◆◆◆

日本神経学会専門医21人、内科学会専門医15人、日本認知症学会3人、脳卒中学会専門医2人

◆◆◆学会認定指導医数◆◆◆

日本内科学会指導医13人、日本神経学会指導医12人

診療科の概説・特徴

脳神経内科は若い学問ですが、当教室は、日本で最も歴史が古い教室の一つです。現在は、小野寺教授の指導の下で、General Neurologist を育成し、神経疾患を克服することを、教室のミッションとしています。脳神経内科で扱う疾患は多彩で、近年、爆発的に患者さんは増加しており、多くのニーズがあります。他の診療科との境界領域も多く、社会と深い関わりがあり、多面的な医療を必要とします。それ故、総合的な臨床力、人間力を必要とし、これらを持つ General Neurologist の育成を心掛けています。また、当科は“脳疾患の克服をめざす”脳研究所に属しています。病理、分子生物学的手法を用いた研究が盛んで、成果をNEJM等の著名誌に発信し、世界を牽引しています。競争的研究資金の獲得額は全国有数です。常に、新しい研究を行い、その成果を実臨床に応用していくという風潮に溢れています。最先端の神経病態研究から、患者さんに寄り添った診療まで、幅広い分野でのプロフェッショナルの育成に励んでいる診療科です。関連病院が多く、しっかりととした診療ネットワークも確立しており、急性期から慢性期まで、ライフスタイルに応じた働き方が可能です。

診療科研修の特徴等

脳神経内科は、臨床と学問、両面の面白さを兼ね備えた診療科で、特徴のある研修が出来ます。臨床面では、最も内科の総合診療に近い診療科です。神経疾患の訴えは多彩で、全身に加え、こころや、生活状況も兼ね合わせて診療する必要があります。また、福祉や、医療倫理面での知識も必要です。これらを含めた総合的な研修を行うことが出来ます。最も大切にしているのが、戦略的な問診と、理学的診察で、検査はその臨床推論を確かめる手段としての位置づけです。この点から、内科の基本手技として身につけるべき“型”を学ぶことが出来ます。経験すると、見識が広がる、稀少な疾患から、ありふれた疾患まで、幅広い研修が可能です。救急疾患も多く、神経救急の実際を学ぶことも出来ます。主治医チームがタイムロス無く治療方針を決めていきますので、体を動かしたいにも向いています。また難しい症例に対しては、上級医にいつでも相談できますので、安心して研修出来ます。全国唯一の脳研究所に属しております、最新の脳科学研究の成果を学ぶこともできます。加えて全国で唯一、神経疾患の病理検討会を毎月行っています。髄液検査、神経生理検査、神経画像検査、神経超音波検査、筋・神経生検、遺伝子検査、病理検査そして、神経診察法や、神経救急などを研修期間で効率よく研修できるように配慮しています。教授が替わったばかりの若い体制で、アットホームで、かつ学問に対する意欲に溢れている教室です。

腫瘍内科

診療科目：腫瘍内科

診療科担当研修責任者名：西條 康夫（腫瘍内科教授）
診療科連絡先担当者名：森山 雅人（腫瘍内科総括医長）

連絡先：oncology@med.niigata-u.ac.jp

新臨床研修医指導実績：平成27年度：2人。28年度：0人。29年度：0人。30年度：1人。令和元年度：6人。

受入期間：1ヶ月以上

同時受け入れ可能数：1人

◇◇◇ 学会認定専門医数◇◇◇

がん薬物療法専門医3人、呼吸器学会専門医1人、血液専門医1人、総合内科専門医2人、臨床検査専門医1人

◇◇◇ 学会認定指導医数◇◇◇

がん薬物療法指導医1人、呼吸器学会指導医1人、血液学会指導医1人、内科学会指導医2人

診療科の概説・特徴

当診療科は2012年11月に誕生した新しい診療科です。従来、臓器別診療の中で行われてきた「がん薬物療法」を臓器横断的に行います。進歩の著しい分子標的治療薬を取り入れ、様々ながんに対する薬物療法を実践する腫瘍内科の研修を行っています。

診療科研修の特徴等

本プログラムは内科学、特に腫瘍内科学の研修を希望する医師を対象としたものです。研修内容は、主な悪性腫瘍である消化器悪性腫瘍、胸部悪性腫瘍、および乳腺腫瘍等について、基本的な知識や診察法、検査所見の考え方などを習得し、がん薬物療法の基礎を理解することを目的としています。また、悪性腫瘍患者および家族の心理や背景を把握し、緩和治療の基本を習得することも目的としています。腫瘍内科研修を通じて、悪性腫瘍患者の全人的な診療が可能となるよう養成します。

精神科

診療科目：一般精神科、心療科、児童精神科、リエゾン精神科、老年精神科

診療科担当研修責任者名：染矢 俊幸（精神科教授）
診療科連絡先担当者名：茂木 崇治（臨床研修実施専門委員）

連絡先：moteji@med.niigata-u.ac.jp

新臨床研修医指導実績：平成16年度：44人。17年度：47人。18年度：14人。19年度：17人。20年度：15人。21年度：24人。22年度：24人。23年度：10人。24年度：3人。25年度：4人。26年度：8人。27年度：9人。28年度：13人。29年度：18人。30年度：25人。令和元年度：21人。

受入期間：1ヶ月以上

同時受け入れ可能数：5人以内

◇◇◇ 学会認定専門医数◇◇◇

日本精神神経学会専門医26人、日本臨床精神神経薬理学会専門医6人、日本総合病院精神医学会専門医1人、日本小児精神神経学会認定医3人、日本臨床薬理学会認定医1人、日本認知症学会専門医1人、日本児童青年精神医学会認定医1人、こどものこころ専門医2人

◇◇◇ 学会認定指導医数◇◇◇

日本精神神経学会指導医21人、日本臨床精神神経薬理学会指導医4人、日本臨床薬理学会指導医1人、日本総合病院精神医学会指導医1人、日本認知症学会指導医1人

診療科の概説・特徴

最新の国際的診断基準の導入や、エビデンスに基づいた診療など、優れた精神科臨床の実践を目指している。最近では、うつ病の増加、児童の心の問題、認知症の増加など、精神医療のニーズが非常に高まっている。当科では、こうした様々な疾患に十分対応できる臨床医の育成に取り組んでいる。診断学と治療学は臨床上、最も大切な技能であり、指導医はこうした技術を十分に習得できるよう努力している。今後爆発的な需要が見込まれる児童思春期精神医学についても、専門医を養成するため、国内の専門機関との人材交流などのプログラムを用意している。活発な臨床活動から生じる様々な疑問を解決しようとする姿勢を重視し、約10領域の臨床研究グループが、新しい知見を国内外に精力的に発表している。

診療科研修の特徴等

午前中は主に外来、午後からは入院研修を行う。外来研修では、最初に新患者の予診を行い、その後診断学について専門的教育を受けた上級医師と共に診察を行った上で、診断及び治療方針を確定する。当科研修中は毎日これを繰り返すことで、診断学について習熟できる。

入院研修ではプライマリケアで扱うことの多いうつ病、不安障害、認知症、意識障害（せん妄）や統合失調症を中心に3症例以上を担当する。研修医は2～3人で構成される主治医グループの一員として診察にあたり、主治医グループ全員参加による週1回のグループ回診、及び毎週火曜日に行われる医師全員参加による検討会に参加する。検討会では、詳細な総括を作成し、新入院患者全員に対して面接を行い、診断及び治療方針について活発な議論を行う。更に入院中の患者全員についても毎週ショートプレゼンテーションを行うため、全医師が全患者の情報を共有し、グループ以外の医師から多くの助言を得られる。

症例検討会では診断に悩む症例や治療困難症例などについて文献的考察を行った上で活発な議論が交わされる。時季が合えば上級医に帯同して全国規模の学会やセミナーに参加することができる。

小児科

診療科目：小児科

診療科担当研修責任者名：齋藤 昭彦（小児科教授）
診療科連絡先担当者名：今村 勝（小児科総括医長）

連絡先：shounika@med.niigata-u.ac.jp

新臨床研修医指導実績：平成16年度：26人。17年度：22人。18年度：21人。19年度：18人。20年度：9人。21年度：27人。22年度：33人。
23年度：10人。24年度：9人。25年度：3人。26年度：6人。27年度：5人。28年度：7人。29年度：10人。
30年度：6人。令和元年度：9人。

受入期間：1ヶ月以上

同時受け入れ可能数：5人以内

◇◇◇学会認定専門医数◇◇◇

小児科学会専門医26人、腎臓学会専門医2人、内分泌学会内分泌代謝専門医1人、糖尿病学会専門医1人、周産期専門医2人、血液学会専門医5人、感染症専門医2人、臨床遺伝専門医1人、小児循環器専門医2人、甲状腺学会専門医1人、小児血液がん専門医3人、リウマチ専門医1人、造血細胞移植認定医2人、周産期新生児専門医4人

◇◇◇学会認定指導医数◇◇◇

小児科学会指導医11人、内分泌学会内分泌代謝指導医1人、感染症指導医2人、小児血液がん指導医1人、リウマチ指導医1人、小児感染症暫定指導医2人、周産期指導医1人、周産期新生児指導医1人

診療科の概説・特徴

診療科研修の特徴等

新潟大学病院小児科は、未来を担う子ども達の代弁者（Advocate）としての小児科医、高度な専門性を持つと同時に「全人的医療」ができる小児科医を育成することを目標にしています。過去20年で150人以上の若い力が私共の教室に参加し、全国でも有数の小児科医数を育成してきました。小児科の主要領域（腎臓、リウマチ・膠原病、血液・腫瘍・免疫、循環器、感染症、内分泌・代謝、新生児）において、国際性、多様性、熟意を持つ各専門指導医を揃えていますので、研修医の皆さんには小児医療における難解な初期診断や治療方針の決定や入院管理の過程で、様々な経験を積んでいただくことが出来ます。また、救急医療では小児における総合診療の経験も得ることも可能です。

小児病棟と周産母子センター新生児集中治療部において、6つの専門グループに分かれて小児の主要な領域の診療に当たっています。研修医の先生には各診療チームの一員として診療に当たってもらいます。毎朝8：15からジャーナルクラブ、症例検討、小講座など30分間のカンファレンスを行っています。研修医にも積極的に参加して頂きます。毎週木曜日には症例検討会、教授回診があります。担当外の症例についての検討に参加してもらいます。この病棟研修を通じて、問診、患児やご家族とのコミュニケーションのとり方、診察法、検査の出し方、そしてその結果の評価法を研修します。外来診療研修では、採血、点滴、注射といった処置や、新患の予診などを行います。当科の外来は処置が多いので、4週間の研修でも幼小児の処置が一通りできるようになります。さらに、研修医の皆さんが小児急性疾患・救急疾患を経験できるように、一般救急研修の充実を図っています。新潟市医師会のご協力により新潟市急患センターで小児一次救急の研修を、そして当科が二次輪番救急当番日に指導医とともに当直をすることによって緊急入院における初期対応の経験を積むことができます。

学術的な指導も充実しています。教室員によるリサーチミーティングにも参加していただけます。また研修最終週には学会形式の症例報告会も行い、学会発表におけるスキルについても学ぶことができます。

消化器外科、乳腺・内分泌外科

診療科目：消化器外科、一般外科、乳腺・内分泌外科

診療科担当研修責任者名：若井 俊文（消化器・一般外科、乳腺内分泌外科教授）
診療科連絡先担当者名：永橋 昌幸（消化器・一般外科、乳腺内分泌外科総括医長）

連絡先：su1admin@med.niigata-u.ac.jp

新臨床研修医指導実績：平成16年度：34人。17年度：41人。18年度：18人。19年度：7人。20年度：3人。21年度：5人。22年度：4人。
23年度：4人。24年度：3人。25年度：1人。26年度：1人。27年度：3人。28年度：4人。29年度：6人。
30年度：2人。令和元年度：4人。

受入期間：1ヶ月以上

同時受け入れ可能数：6人以内

◇◇◇学会認定専門医数◇◇◇

外科学会専門医25人、消化器外科学会専門医15人、乳癌学会専門医4人、消化器病学会専門医7人、大腸肛門病学会専門医3人、消化器内視鏡学会専門医1人、肝胆膵外科高度技能専門医1人、日本救急医学会専門医1人、内分泌・甲状腺外科学会専門医1人

◇◇◇学会認定指導医数◇◇◇

外科学会指導医6人、消化器外科学会指導医7人、消化器病学会指導医1人、肝胆膵外科高度技能指導医2人、乳癌学会指導医1人、大腸肛門病指導医2人、胆道学会指導医2人

診療科の概説・特徴

診療科研修の特徴等

当科は新潟医学専門学校創立当初の外科学教室として開設以来、技術の高い信頼できる外科医を育成・輩出してきました。現在、消化器・一般外科として、主に上部消化管、下部消化管、肝胆膵・移植、乳腺の4つを担当領域の主軸としています。新しい外科技術を駆使できる応用力、チーム医療をリードする協調性と指導力、Academic surgeonを目指す学術的な推進力、こうした要素を持った人材を一人でも多く育成できよう、診療・指導にあたっています。新潟県内、日本国内のみならず、海外にも通用するマルチタレントな外科医の育成を目標としています。

消化器・一般外科コース、乳腺専門医コースの2つがあります。
外科医に要求される基礎的な診療能力（医療技術、問題解決能力、チーム医療）の習得をめざします。
1) 多様な外科疾患・手術を経験することにより、最終的には高難度手術・先端的な手術へつながる幅広い外科的技術が身につくよう指導します。外科専門医資格取得に必須である呼吸循環外科、小児外科の研修も可能になっています。消化器外科を志す初期研修医（選択コース）に対して、主要消化器手術および腹腔鏡実習トレーニングを積極的に行ってもらっています。
2) 専門性に必要な学術的業績の指導も行い、国際的にも活躍できる人材の育成を目指します。また外科医同士の連携・人脈を実感してもらうため学外研修・研究会および学会参加・海外留学を積極的に行ってています。将来、視野を広くもち、困難な症例・状況を問題解決していく能力につながります。
3) 大学およびハイポリューム病院での研修を組み合わせた研修が基本です。多くの指導医から手術技能・知識を獲得しながら、専門医資格（卒後6年目）をとるだけでなく、基本的外科手術そして医療技術にて救命する力をもつ、患者・他科医師から信頼される Academic surgeon をを目指してください。

心臓血管外科、呼吸器外科

診療科目：心臓血管外科、呼吸器外科

診療科担当研修責任者名：土田 正則（心臓血管外科、呼吸器外科教授） 診療科連絡先担当者名：岡本 竹司（心臓血管外科、呼吸器外科総括医長）	連絡先：su2sec@med.niigata-u.ac.jp
---	--------------------------------

新臨床研修医指導実績：平成16年度：20人。17年度：19人。18年度：10人。19年度：7人。20年度：3人。21年度：1人。22年度：1人。
23年度：1人。24年度：1人。25年度：0人。26年度：3人。27年度：3人。28年度：1人。29年度：2人。
30年度：4人。令和元年度：6人。

受入期間：1ヶ月以上	同時受け入れ可能数：5人以内
------------	----------------

◇◇◇ 学会認定専門医数◇◇◇

外科学会専門医12人、心臓血管外科4人、呼吸器外科3人

◇◇◇ 学会認定指導医数◇◇◇

日本胸部外科学会指導医1人、日本外科学会指導医1人、日本呼吸器外科学会指導医2人

診療科の概説・特徴

新潟大学に於ける胸部外科手術は昭和20年代の肺結核手術や閉鎖式心臓手術に始まる。昭和38年に心臓血管外科手術、呼吸器外科手術を担当する現在の形の外科学第二講座が誕生し、以来、新潟県内を中心に最先端で高度な技術、安全な手術を提供し続けてきた。小児心臓外科では新生児複雑心疾患手術の症例数も多く、国立大学病院屈指の手術件数に達している。また、成人心臓血管外科では従来の開心術に加え、ステントグラフト治療も数多く行っている。呼吸器外科においては切除困難症例の手術に積極的に取り組む一方、鏡視下手術などの手術の低侵襲化にも重点を置き、肺葉切除では完全鏡下手術が標準的な手技となっている。

診療科研修の特徴等

循環器外科と腫瘍外科を中心とした呼吸器外科という異なる面を持つ診療を行っているが、研修期間では研修医が興味を持っている分野で研修することも、双方の研修を行うことも可能である。チーム医療が基本であり、指導医の下に修練医と研修医というチーム構成になる。常に指導医や修練医と診療を行い、外科的な考え方や手技を重点に研修をする。但し、研修医であっても個々の能力によっては、指導医の指導のもとに術者として手術を行う機会を与える。将来、外科専門医取得を目指す研修医にとっては、当科での研修期間で、当科の分野の手術の必要症例数を経験することが可能である。心臓血管外科は循環器内科、小児心臓内科、放射線診断科との検討会、呼吸器外科は放射線診断科・治療科、呼吸器内科、病理部との検討会を定期的に開いており、それぞれの分野の知識を深めることができる。

整形外科

診療科目：整形外科全般、四肢脊椎外傷、股関節・膝関節・スポーツ医学、骨軟部腫瘍外科、関節リウマチ、脊椎・脊髄外科、手の外科、骨粗鬆症

診療科担当研修責任者名：川島 寛之（整形外科教授） 診療科連絡先担当者名：谷藤 廉（整形外科総括医長）	連絡先：tanifugi@med.niigata-u.ac.jp
--	----------------------------------

新臨床研修医指導実績：平成17年度：1人。18年度：1人。19年度：3人。20年度：1人。21年度：4人。22年度：3人。23年度：1人。
24年度：3人。25年度：0人。26年度：1人。27年度：2人。28年度：4人。29年度：4人。30年度：3人。
令和元年度：3人。

受入期間：1ヶ月以上	同時受け入れ可能数：5人以内
------------	----------------

◇◇◇ 学会認定専門医数◇◇◇

日本整形外科学会専門医22人、日本整形外科学会認定脊椎脊髄病医8人、日本体育協会認定スポーツドクター3人、日本リウマチ学会専門医2人、日本リハビリテーション医学会専門医1人、日本手外科学会専門医1人、日本人工関節学会認定医4人、日本整形外科学会認定骨・軟印腫瘍医2人

◇◇◇ 学会認定指導医数◇◇◇

日本リウマチ学会指導医2人、日本脊椎脊髄病学会 脊椎脊髄外科指導医4人

診療科の概説・特徴

新潟大学整形外科学講座は大正6年(1917年)本邦で4番目に開講し、100年目を迎える国内有数の伝統教室です。伝統を大事にしながら最新の治療法も導入し、整形外科のすべての分野において高いレベルの治療を行っています。地域の中核施設として数多くの治療困難例の治療を担当しておりますが、外傷など多彩な疾患の治療も行っております。

診療科研修の特徴等

整形外科における基本的な診断、治療の実際を学んでいただくことを第一の目標とします。そのため整形外科のいくつかの分野にわたってバランス良く研修をしていただくことになります。診療はグループごとに行っておりますので、このグループの一員として診療にあたっていただきます。外傷例が搬入された際には、外傷治療のチームの一員として救急処置、手術の研修も可能です。期間中に可能な限り術者としての経験もしていただいております。術前、術後検討会への出席、各診療班ごとの検討会への出席、抄読会、X線画像検討会、その他レジデント向けの講義などを行っており、短期間であっても整形外科に関する基礎的な知識や処置を研修していただけることを目標としております。希望に応じてリハビリテーションの研修も可能です。

形成外科

診療科目：一般形成外科、再建外科、頭蓋顎面外科、手外科	
診療科担当研修責任者名：松田 健（形成外科教授） 診療科連絡先担当者名：曾束 洋平（形成外科総括医長）	連絡先：sotsu@med.niigata-u.ac.jp
新臨床研修医指導実績：平成16年度：2人。17年度：2人。18年度：2人。19年度：3人。20年度：0人。21年度：1人。22年度：0人。 23年度：1人。24年度：2人。25年度：1人。26年度：2人。27年度：3人。28年度：1人。29年度：4人。 30年度：1人。令和元年度：4人。	
受入期間：1ヶ月以上	同時受け入れ可能数：2人以内
◇◇◇ 学会認定専門医数 ◇◇◇	
形成外科専門医 7人、レーザー専門医 1人、手外科専門医 1人、創傷外科専門医 1人、皮膚腫瘍外科指導専門医 4人、頭蓋顎面外科専門医 2人、熱傷学会専門医 2人、再建マイクロサージャリー分野指導医 2人	
◇◇◇ 学会認定指導医数 ◇◇◇	
形成外科指導医 5人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴等
形成外科はあらゆる手技（植皮術・皮弁移植術、マイクロサージャリー、口唇・口蓋裂の形成術など）を駆使し、先天的・後天的な身体の醜状変形に対し、機能・形態を正常にすることで、患者の社会適応を目指す外科学です。最良の形態・機能を再建することは患者のQOLを大幅に改善し、時に人生を変えるほどの影響をもたらします。形成外科単独の診療はもちろん、耳鼻咽喉科・外科・整形外科・救命救急科・脳神経外科・眼科・口腔外科・泌尿器科・皮膚科など、多くの診療科と共に診療・再建手術を行うことで新潟大学医歯学総合病院としてのより高いレベルの治療提供に貢献しています。また、先進医療にも積極的に取り組み、常に世界の最先端を視野に入れた知識と技術習得への挑戦を怠らず精力的に診療に取り組んでいます。	比較的小さい局麻手術から大がかりな再建手術、先天奇形や難治性潰瘍、外傷など、当院では形成外科の診療領域のほぼすべてをまんべんなく経験することができます。多様な症例を通して様々な「きず」をどのように診て、扱い、きれいに修復するのかを学んでもらいたいと考えています。当科では基本的に上級医師も患者の主治医としてチームを組んで治療にあたる体制にしており、手術目的、その具体的な内容、術直後の指示、退院までの治療計画等につき直接学ぶことが可能です。担当症例の手術には助手として参加し、上級主治医から局所解剖や手術の要点についての詳しい解説を受け、これらを通して形成外科の基本である皮膚縫合、皮膚移植術などの指導も同時にうけます。また、当科では顕微鏡下でのマイクロサージャリーの体験、訓練を行うことのできる設備も整っています。上級医から血管・神経の縫合法の技術指導を受けることが可能です。外来においては、予診のとり方、写真撮影法などを習得し、上級医師の診察について、所見のとり方、治療計画のたてかたの指導を受け、担当症例の短期成績あるいは、類似症例の長期結果を学ぶことになります。

小児外科

診療科目：小児外科	
診療科担当研修責任者名：木下 義晶（小児外科教授） 診療科連絡先担当者名：小林 隆（小児外科総括医長）	連絡先：kobataka@med.niigata-u.ac.jp
新臨床研修医指導実績：平成16年度：9人。17年度：11人。18年度：9人。19年度：1人。20年度：4人。21年度：6人。22年度：0人。 23年度：4人。24年度：1人。25年度：0人。26年度：1人。27年度：1人。28年度：2人。29年度：1人。 30年度：0人。令和元年度：2人。	
受入期間：1ヶ月以上	同時受け入れ可能数：2人以内
◇◇◇ 学会認定専門医数 ◇◇◇	
日本小児外科学会専門医 3人、日本外科学会専門医 4人、日本小児泌尿器科学会認定医 1人、小児がん学会認定外科医 1人	
◇◇◇ 学会認定指導医数 ◇◇◇	
日本小児外科学会指導医 1人、日本外科学会指導医 1人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴等
当科の歴史は、新潟大学外科教室の中に小児外科研究班が生まれた昭和45年に遡ります。その後昭和56年に診療科が付属病院に開設され、それから10年間の診療実績が評価され平成3年に小児外科学講座として独立し現在に至っています。国立大医学部で小児外科講座を有するのは12大学しかなく、小児外科の臨床・研究に大きな業績を上げてきました。過去40年以上にわたる豊富なデータを有し、過去の実績に基づいた確かな診療を行つ一方で、内視鏡手術など最先端の手術手技を導入し更なる発展を見せています。また、他科の小児診療チームとの連携も確立しており、総合的な小児医療を学ぶことができます。 また、小児固体悪性腫瘍の治療では、Niigata Tumor Board を40年前から立ちあげ、新潟県全体で統一した治療を行い、良好な成績をおさめています。	小児外科は、原則として一般小児外科研修を基本とし、その他新生児診療・小児救急疾患への対応等を広く研修できるシステムになっています。短期間の研修であっても、小児外科だけではなく外科的周術期管理の考え方、検査の目的と異常所見の意義（成人と小児を比較しながら）について理解することができます。また、毎日、指導教官、研修医、学生で行う朝カンファレンスに参加することで各症例の病状プレゼンテーション能力をトレーニングすることができます。かつ腹部・胸部Xp、CT、MRI、造影検査、シンチグラフィー等の臨床医として必須の画像検査を全員でディスカッションすることで、画像診断能力も高めることができます。手技的な実地研修においては、比較的な容易な手術の執刀、小児外科手技の習得の他、日常診療の中で乳幼児の採血、静脈ルート確保等、将来の専門分野に関わらず、臨床医としての必要技能をスキルアップできると思います。

脳神経外科

診療科目：脳神経外科

診療科担当研修責任者名：藤井 幸彦（脳神経外科教授）
診療科連絡先担当者名：岡田 正康（脳神経外科総括医長）

連絡先：masayasu_okd@bri.niigata-u.ac.jp

新臨床研修医指導実績：平成16年度：0人。17年度：0人。18年度：1人。19年度：3人。20年度：3人。21年度：5人。22年度：3人。
23年度：1人。24年度：2人。25年度：1人。26年度：0人。27年度：0人。28年度：0人。29年度：1人。
30年度：2人。令和元年度：5人。

受入期間：1ヶ月以上

同時受け入れ可能数：4人以内

◇◇◇ 学会認定専門医数◇◇◇

脳神経外科学会専門医20人、脳卒中学会専門医3人、てんかん学会専門医2人、神経内視鏡学会技術認定医5人、日本がん治療認定医3人、脳神経血管内治療学会専門医6人

◇◇◇ 学会認定指導医数◇◇◇

脳神経血管内治療学会指導医1人

診療科の概説・特徴

昭和28年（1953年）に、日本で最初に脳神経外科学専門の講座として独立し、日本脳神経外科黎明期からの歴史を持つ伝統的な教室であるがゆえに、県内外に広がる関連病院として、救急救命治療や多数の脳外科手術をこなす基幹病院、新潟県内各地で神経疾患診療の重要な拠点病院を多数有し、多くの優れた人材を輩出している。一方、神経内科とともに、新潟大学脳研究所という基礎と臨床が一体となった研究組織に所属していることも特筆に値する。ヒト用7テスラMRI装置等を有する統合脳機能研究センターを始めとして、脳神経外科の診療、研究、教育を行う上で、世界屈指の恵まれた環境である。

診療科研修の特徴等

当科は、神経疾患の中でもとりわけ脳腫瘍、脳血管障害、下垂体疾患、新生児・小児神経疾患、機能性疾患などを対象としており、高難度の手術治療をする症例が多く、チームで一丸となって診療に取り組んでいる。研修ではこの臨床チームに属し、担当症例の主治医団の一員として治療計画や実際の手術に携わって貢献することとなる。加えて日々搬送されて来る神経救急疾患の対応も多く、具体的には脳塞栓急性期、クモ膜下出血、重症頭部外傷などの救急診療にあたっている。このような経験を通して、神経救急患者に冷静に対応できる実力や全身管理にまつわる知識を身につけることができるようになる。カンファレンスは術前検討会・外来新患症例検討会が週2回（月、水の夕方）、術後報告会が週2回（火、木の朝）、IVR検討会が週1回（水の朝）行われ、研究発表、抄読会などの勉強会が毎週水曜日の術前検討会後に行われており、臨床に必要な考え方を学ぶことができる。その他、新潟市内の関連病院において機能外科（てんかん外科など）や脊髄外科を研修することも可能である。当科は脳研究所に属し、統合脳機能研究センター、神経病理、神経内科、その他の神経基礎講座との横断的交流もあり、特に神経研究に興味のある諸君においては、研修期間中にさらに一步進んだ経験の機会を得ることも可能である。

皮膚科

診療科目：皮膚科一般、膠原病、接触アレルギー、脱毛症、皮膚悪性腫瘍、葉疹、遺伝性皮膚疾患など

診療科担当研修責任者名：阿部 理一郎（皮膚科教授）
診療科連絡先担当者名：濱 菜摘（皮膚科総括医長）

連絡先：（電話）025-227-2282；（Fax）025-227-0783
（Email）natsumih@med.niigata-u.ac.jp

新臨床研修医指導実績：平成16年度：3人。17年度：3人。18年度：2人。19年度：3人。20年度：3人。21年度：4人。22年度：2人。
23年度：5人。24年度：6人。25年度：7人。26年度：6人。27年度：5人。28年度：8人。29年度：7人。
30年度：13人。令和元年度：14人。

受入期間：1ヶ月以上

同時受け入れ可能数：3人以内

◇◇◇ 学会認定専門医数◇◇◇

皮膚科専門医8人

◇◇◇ 学会認定指導医数◇◇◇

皮膚科学会認定指導医4人

診療科の概説・特徴

新潟大学の前身である新潟医科大学時代から伝統をもち、新潟県の皮膚科診療の中核を担っている。皮膚疾患全般を診療の対象とし、高次皮膚科診療施設として難治あるいは重症皮膚疾患者を多数受け入れているほか、多岐にわたるサブスペシャリティを持ち、各種専門外来を設けている。膠原病外来ではエリテマトーデス、強皮症、皮膚筋炎の治療、接触皮膚炎外来ではパッチテストによる原因検索、脱毛症外来では円形脱毛症に対する局所免疫療法と遺伝性毛髪疾患の走査電鏡および遺伝子検索による診断とサポート、腫瘍外来では皮膚腫瘍全般的治療、アトピー外来では治療に加え生活指導を行っている。当施設で皮膚科領域全体をカバーする研修が可能である。

診療科研修の特徴等

卒後臨床研修では多彩な皮膚疾患の診療を理解するため、原則として午前中は新患外来および外来処置・手術室で研修を行い、希望により各種専門外来での研修や中央手術室での研修も行う。午後は病棟主治医グループの一員として研修を行う。膠原病、接触アレルギー、皮膚腫瘍を対象とする専門グループと、他疾患全般を対象とする一般グループから希望により選択でき、複数グループの研修も可能である。さらに症例検討会（週1回）で高度な臨床および皮膚病理組織診断の現場を体験できる。

専門研修では皮膚疾患全般に適切に対応できる診療能力を修得し、全人的医療の実践を目指す。新潟大学医歯学総合病院とその関連病院で研修し、6年目以降に日本皮膚科学会認定皮膚科専門医を取得した上で、サブスペシャリティに応じた各種指導専門医（現在、皮膚悪性腫瘍指導専門医と美容皮膚科・レーザー指導専門医があり、今後も多数導入予定あり）の取得を目指す。専門研修ならびに生涯教育のための充実した学術環境として、伝統ある日本皮膚科学会新潟地方会がある。大学院へ進学し皮膚科関連課題の研究による学位取得も可能であり、取得後の海外留学も盛んである（海外留学の希望は最優先させている）。卒後10年目以降は、大学病院で後輩の指導と研究を行い教員を目指すコースと、関連病院で指導医として研修医や若手皮膚科医の指導にあたるコースがある。

泌尿器科

診療科目：泌尿器科

診療科担当研修責任者名：富田 善彦（泌尿器科教授）
診療科連絡先担当者名：星井 達彦（泌尿器科総括医長） 連絡先：(電話) 025-227-2289 ; (Fax) 025-227-0784
(Email) t-hoshii@med.niigata-u.ac.jp

新臨床研修医指導実績：平成16年度：0人。17年度：1人。18年度：0人。19年度：2人。20年度：2人。21年度：1人。22年度：2人。
23年度：2人。24年度：2人。25年度：2人。26年度：1人。27年度：3人。28年度：1人。29年度：5人。
30年度：2人。令和元年度：4人。

受入期間：1ヶ月以上

同時受け入れ可能数：3人以内

◇◇◇ 学会認定専門医数◇◇◇

泌尿器科専門医16人、日本泌尿器内視鏡学会泌尿器腹腔鏡技術認定医6人、日本内視鏡外科学会技術認定医6人、日本がん治療認定医4人、日本癌治療学会臨床試験登録医1人、日本臨床腎移植学会腎移植認定医2人、日本移植学会移植認定医3人、日本排尿機能学会排尿機能専門医2人、日本小児泌尿器科学会認定医2人、da Vinci サージカルシステムパイロット（手術医）5人

◇◇◇ 学会認定指導医数◇◇◇

日本泌尿器科学会指導医13人、日本泌尿器科学会・日本泌尿器内視鏡学会・泌尿器ロボット支援手術プロクター2人

診療科の概説・特徴

泌尿器科は外科学の一分野を担っているが、扱う臓器・疾患の範囲は広い。当科における特色をなす分野としては、泌尿器腫瘍学、神経泌尿器科学、腎移植学、泌尿器内視鏡外科学等が挙げられるが、これらの分野では新潟県内のリーダー的役割を果たすだけではなく、対外的にも評価されていると自負している。とくに腎移植については我が国で初めて腎移植を行った歴史があり、現在も積極的に移植再生医療を進めており、その症例数も飛躍的に増加している。

腫瘍学の分野では、特に腎癌においては世界的な開発実験に参加するなど、本領域における先進的医療の牽引役を担っている。

内視鏡外科学においては、腹腔鏡下副腎摘除術を世界で初めて行って以来、低侵襲の治療として腹腔鏡手術を積極的に行っていている。また、平成26年2月より、ロボット（da Vinci）支援下での前立腺癌全摘除手術を開始し、28年11月にはロボット支援下での腎部切除術を開始した。

診療科研修の特徴等

当科では、4～5人の医師で構成される主治医グループの一員となり研修を行う。担当患者は偏りがないように受け持たされ、泌尿器科で扱う主要疾患の診療が理解できるように主治医グループから指導を受ける。これにより腎移植、泌尿器科腫瘍疾患、小児泌尿器疾患等の診療の一般的な流れについて把握することとなる。研修期間によっては、様々な腹腔鏡手術を見学する。献腎移植等の緊急手術に立ち会うなどの当科研修ならではの経験ができることがある。週2日（火・木）は外来での研修が主となり、泌尿器科外来で一般的に行われる処置・検査を研修する。月・水・金曜日の週3日が当科の手術日であり、症例によるが、原則として担当医の一人として手術に立ち会い、泌尿器外科医としての基本研修を積む。術前・術後の症例検討会が毎週木曜の夕方に行われる。各症例の治療方針について主治医グループの分け隔てなく検討・討論され、研修医も参加することになる。

眼科

診療科目：眼科

診療科担当研修責任者名：福地 健郎（眼科教授）
診療科連絡先担当者名：梅野 哲哉（眼科総括医長） 連絡先：togauchi@med.niigata-u.ac.jp

新臨床研修医指導実績：平成17年度：4人。18年度：4人。19年度：5人。20年度：3人。21年度：2人。22年度：2人。23年度：3人。
24年度：1人。25年度：0人。26年度：5人。27年度：2人。28年度：9人。29年度：5人。30年度：5人。
令和元年度：5人。

受入期間：1ヶ月以上

同時受け入れ可能数：5人以内

◇◇◇ 学会認定専門医数◇◇◇

17人（大学に在籍する専門医の数）

◇◇◇ 学会認定指導医数◇◇◇

日本眼科学会指導医5人（大学に在籍する指導医の数）

診療科の概説・特徴

新潟大学眼科は明治43年新潟医学専門学校の創設とともに開講された。100年以上の歴史を有する日本でも数少ない眼科学講座の一つである。教室の主たる特色たるテーマは緑内障であり、基礎研究実績をこれまでに多数積み上げ、緑内障研究の第一線を歩んできた。臨床的にも県内外から多くの患者が来院し、非常に高度な緑内障診療が日常的に行われている。また、その手術実績は国内1、2を争い、その存在は際立っている。また緑内障だけでなく網膜・硝子体、角膜・感染症、斜視・弱視、白内障班、神経眼科班、腫瘍・形成班がある。研修中は1グループを1ヶ月交代で担当するが、研修期間により診療班の重複や交代時期をflexibleに対応することも可能である。当科手術日は月・水・金曜日であり、各グループで手術日が異なるが、他のグループの手術見学も可能である。術前・術後・難症例に対する診療科長を含めた回診が毎週水曜日に行われる。症例検討会も同日に行われ、研修期間中、担当患者の症例発表も行う。その他の曜日は、外来と病棟研修になる。外来多くの専門外来があるため、見学だけでなく処置の助手等も担当することになる。どのグループに属しても細隙灯頭微鏡や倒像鏡など最も基本的な眼科診療手技を身につけるとともに、視野検査や眼底造影検査などの所見を判読するトレーニングを行う。

診療科研修の特徴等

当科では疾患別に診療チームが構成されており、緑内障班、網膜・硝子体班、角膜・感染症班、斜視・弱視班、白内障班、神経眼科班、腫瘍・形成班がある。研修中は1グループを1ヶ月交代で担当するが、研修期間により診療班の重複や交代時期をflexibleに対応することも可能である。当科手術日は月・水・金曜日であり、各グループで手術日が異なるが、他のグループの手術見学も可能である。術前・術後・難症例に対する診療科長を含めた回診が毎週水曜日に行われる。症例検討会も同日に行われ、研修期間中、担当患者の症例発表も行う。その他の曜日は、外来と病棟研修になる。外来多くの専門外来があるため、見学だけでなく処置の助手等も担当することになる。どのグループに属しても細隙灯頭微鏡や倒像鏡など最も基本的な眼科診療手技を身につけるとともに、視野検査や眼底造影検査などの所見を判読するトレーニングを行う。

耳鼻咽喉科・頭頸部外科

診療科目：耳鼻咽喉科、頭頸部外科	
診療科担当研修責任者名：堀井 新（耳鼻咽喉科教授） 診療科連絡先担当者名：森田 由香（耳鼻咽喉科総括医長）	連絡先：entsouka@med.niigata-u.ac.jp
新臨床研修医指導実績：平成16年度：1人。17年度：1人。18年度：0人。19年度：1人。20年度：3人。21年度：6人。22年度：4人。 23年度：5人。24年度：7人。25年度：1人。26年度：4人。27年度：3人。28年度：5人。29年度：10人。 30年度：4人。令和元年度：7人。	
受入期間：1ヶ月以上	
同時受け入れ可能数：5人以内	
◇◇◇ 学会認定専門医数◇◇◇	
日本耳鼻咽喉科学会専門医14人、日本頭頸部外科学会頭頸部がん専門医4人、日本癌治療学会認定医4人、内分泌外科専門医1人	
◇◇◇ 学会認定指導医数◇◇◇	
日本耳鼻咽喉科学会専門研修指導医10人、日本頭頸部外科学会頭頸部がん専門指導医1人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴等
耳鼻咽喉科・頭頸部外科領域の全ての分野を網羅した、良質で安全な医療の提供をモットーとしている。側頭骨領域の外科的治療、人工耳膜、頭頸部癌の集学的治療、内視鏡下副鼻腔手術など高度な医療を実践しており、受診患者は新潟県内にとどまらない。特に側頭骨領域の手術数は多い。同時に大学病院でありながら、周辺地域の耳鼻咽喉科救急医療をはじめとした一次、二次医療に対するニーズにも応えており、扱う症例は非常に多岐に渡っている。	病棟では主治医とともに患者を担当し、病棟業務、手術に携わる。入院から治療、退院にいたる一連の流れの中で、診察法、検査手技、処置法、手術手技の基本が自然に習得される。担当する患者については耳鼻咽喉科疾患を偏りなく経験できるよう配慮されている。 外来では指導医とともに神経耳科学的検査、内視鏡検査、外来治療、手術前後の管理などを習得する。 また、毎週の症例検討会では、全入院症例の検討を全員で行っている。各診療班による検討会も盛んに行われており、これらの検討会に参加することにより診断、治療に関する最新の知識を偏りなく習得できる。また病棟、外来には最新の内視鏡や顕微鏡モニターシステム、医局検討会室にはAVプレゼンテーションシステムが完備されている。これらにより從来わかりにくくされてきた耳鼻咽喉科所見を常に指導医と共有しながら研修を進めることができる。

産科婦人科

診療科目：産科婦人科	
診療科担当研修責任者名：榎本 隆之（産科婦人科教授） 診療科連絡先担当者名：安達 聰介（産科婦人科総括医長）	連絡先：sadachi@med.niigata-u.ac.jp
新臨床研修医指導実績：平成16年度：24人。17年度：20人。18年度：20人。19年度：17人。20年度：18人。21年度：18人。22年度：28人。 23年度：3人。24年度：4人。25年度：2人。26年度：0人。27年度：0人。28年度：4人。29年度：8人。 30年度：6人。令和元年度：9人。	
受入期間：1.5ヶ月以上	
同時受け入れ可能数：5人以内	
◇◇◇ 学会認定専門医数◇◇◇	
日本産科婦人科学会専門医30人、日本臨床細胞学会細胞診専門医3人、日本婦人科腫瘍学会婦人科腫瘍専門医5人、日本人類遺伝学会臨床遺伝専門医6人、日本生殖医学会生殖医療専門医3人、マンモグラフィ検診委員会マンモグラフィ読影認定医1人、日本内視鏡外科学会技術認定医3人、日本産科婦人科内視鏡学会技術認定医4人、日本周産期・新生児医学会専門医（母体・胎児）5人、日本女性医学学会専門医1人	
◇◇◇ 学会認定指導医数◇◇◇	
日本生殖医学会生殖医療指導医2人、日本周産期新生児医学会指導医2人、日本産科婦人科学会指導医11人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴等
新潟医科大学創設からの伝統のもと、婦人科良性・悪性腫瘍の治療、北陸有数の規模を誇る総合周産期母子医療センターにおけるハイリスク妊娠における妊娠・分娩管理および新生児管理、加えて不妊症、不育症、更年期などの専門領域を含んだ広い分野における研修が可能である。近年は、婦人科悪性腫瘍・良性腫瘍に対する腹腔鏡下手術、精巣内精子を用いた顕微授精、不育免疫療法・母体血による胎児染色体検査（NIPT）など多岐にわたる先進的な診療を施行している。	主治医グループの一員として、積極的に診療に参加することを理念とする。 3週間ずつ産科と婦人科を研修し、以下の内容を到達目標としている。 ・産科：経産分娩の立ち会いを8例、帝王切開術の助手を3例行う。 産科外来で胎児超音波を行う。 妊娠高血圧症症例、切迫早産症例、多胎妊娠症例などを受け持つ。 ・婦人科：婦人科手術の助手を3例行う。 婦人科外来で内診、経腔超音波を行う。 子宮頸癌・子宮体癌・卵巣癌などの悪性疾患症例、および子宮筋腫・卵巣腫瘍などの良性疾患症例を受け持つ。 ・不妊症：体外受精の操作術を行う。 不妊内分泌外来で不妊症検査を行う。 また、火曜朝の術前検討会、木曜朝の産科婦人科検討会、月に2回行われている病理医師との症例カンファレンスに参加する。

放射線科

診療科目：放射線治療、放射線診断、IVR (Interventional Radiology)

診療科担当研修責任者名：吉村 宣彦（放射線診断科准教授）
診療科連絡先担当者名：海津 元樹（放射線科総括医長）

連絡先：kaidu@med.niigata-u.ac.jp

新臨床研修医指導実績：平成16年度：0人。17年度：7人。18年度：7人。19年度：4人。20年度：2人。21年度：1人。22年度：3人。
23年度：2人。24年度：7人。25年度：4人。26年度：1人。27年度：4人。28年度：3人。29年度：6人。
30年度：4人。令和元年度：18人。

受入期間：1ヶ月以上

同時受け入れ可能数：3人以内

◇◇◇ 学会認定専門医数 ◇◇◇

日本医学放射線学会診断専門医12人、日本医学放射線学会治療専門医5人、日本核医学学会専門医3人、日本核医学学会PET核医学認定医1人、マンモグラフィー読影認定医9人、日本IVR学会専門医3人

◇◇◇ 学会認定指導医数 ◇◇◇

日本医学放射線学会認定研修指導者10人

診療科の概説・特徴

県下全域の基幹病院の放射線部門を関連病院とし、新潟県の放射線医療を担う人材を養成している。放射線科は全国的に人手不足に悩まされているが、当科では指導教育を担当するスタッフは、診断、IVR、治療各部門とも充実している。看護師、技師などのco-medical staffも充実し、研修に最適な環境を可能にしている。設備面でも、3T MRI、dual energy CT、PET/CT、高精度放射線照射装置、組織内照射装置など最新の機器をそろえ、放射線診療の基礎から高度先端的な分野まで、研修できる施設となっている。

診療科研修の特徴等

研修プログラムA（放射線診断）

最低1ヶ月を研修期間として受け入れている。1対1の指導によって、頭頸部から胸腹部骨盤四肢まで、全身の三次元的解剖学的知識の形成と、病態生理に基づく画像診断(IVRを含む)の基礎の習得を目指す。

研修プログラムB（放射線治療）

最低1ヶ月を研修期間として受け入れている。外来病棟管理、放射線治療計画、放射線治療中の患者診療といった放射線腫瘍学に基づく放射線治療医療の基礎の習得を目指す。

研修プログラムはA、Bいずれかのみもしくは両者の選択を可能とする。よって研修期間は、A、Bいずれかの場合には1ヶ月、両者の選択の場合は2ヶ月となる。

研修プログラムC：最初の3ヶ月と最後の3ヶ月、当科で研修する、放射線科専門医を希望する人のためのコース。上記A、Bの内容をさらに徹底させるとともに、希望により、CT、エコー、MRI、IVR、神経放射線診断、放射線治療などを個別に深く研修することもできる。

麻酔科

診療科目：麻酔科

診療科担当研修責任者名：馬場 洋（麻酔科教授）
診療科連絡先担当者名：大西 肇（麻酔科総括医長）

連絡先：masui@med.niigata-u.ac.jp

新臨床研修医指導実績：平成16年度：44人(救急として必修)。17年度：42人(救急として必修)。18年度：1人。19年度：11人。20年度：9人。21年度：16人。22年度：10人。23年度：11人。24年度：15人。25年度：7人。26年度：10人。27年度：7人。28年度：9人。29年度：8人。30年度：8人。令和元年度：16人。

受入期間：1ヶ月以上

同時受け入れ可能数：5人以内

◇◇◇ 学会認定専門医数 ◇◇◇

麻酔科専門医21人、心臓血管麻酔専門医3人、ペインクリニック専門医4人

◇◇◇ 学会認定指導医数 ◇◇◇

麻酔科指導医7人

診療科の概説・特徴

麻酔科は1963年に開設された比較的新しい診療科であるが、手術数の増加およびハイリスク症例の増加と共にその必要性も増している。新潟大学病院には14の手術室があるが、麻酔科が管理する年間症例数は5,000件以上に達し、年々増加傾向にある。リスクの低い症例から高い症例まで、様々な症例に対する手術の麻酔・疼痛管理を行っているが、その中には腎臓などの臓器移植麻酔、心臓麻酔、小児麻酔、産科麻酔などの麻酔管理も含まれる。また、術前の患者の状態を把握するため、麻酔科術前外来で麻酔科管理全症例の診察を行っている。さらに、ペインクリニック外来では難治性疼痛患者の診察・治療を行っている。

診療科研修の特徴等

当科研修では、術前評価、麻酔計画、術中管理、術後管理を通して一貫した周術期管理を経験する。麻酔の術前評価として、患者の病歴、服薬、検査所見、身体所見などを取れるようにする。次に術前の全身状態の評価により、適切な麻酔法・麻酔薬を選択でき、同時に吸入麻酔薬や静脈麻酔薬、筋弛緩薬の知識を身につける。さらに、術中管理として気道確保や気管挿管、ラリンジアルマスク挿入など基本的気道管理や末梢・中心静脈、動脈ライン確保など最低限修得すべき手技・知識を身につける。血行動態、血液ガス、電解質を指標にした経時的な輸液管理やバイタルサインのモニタとその意義についても学ぶ。これに加えて、硬膜外、脊髄くも膜下麻酔などの手技をはじめとして、特殊症例の麻酔にも積極的に取り組むようになる。患者の痛みを客観的に評価し、適切な疼痛管理することも重要である。以上のことを指導医とマンツーマンで行い、周術期の全身管理の基本的手技や考え方を身につけることを目標とする。

高次救命災害治療センター

診療科目：救急医学、集中治療医学	
診療科担当研修責任者名：本多 忠幸（救命センター副部長） 診療科連絡先担当者名：本多 忠幸（救命センター副部長）	連絡先：honda@med.niigata-u.ac.jp
新臨床研修医指導実績：平成16年度：44人。17年度：42人。18年度：27人。19年度：21人。20年度：24人。21年度：32人。22年度：23人。 23年度：23人。24年度：22人。25年度：26人。26年度：19人。27年度：12人。28年度：14人。29年度：21人。 30年度：24人。令和元年度：22人。	
受入期間：1ヶ月以上	同時受け入れ可能数：6人以内
◇◇◇ 学会認定専門医数◇◇◇	
救急科専門医5人、集中治療専門医3人、麻酔科専門医2人、総合内科専門医1人	
◇◇◇ 学会認定指導医数◇◇◇	
救急医学会指導医2人、麻酔科指導医1人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴等
当部門は高次救命災害治療センターとして日本海側初めての高度救命救急センターである。救命救急センター20床と集中治療部8床の計28床で運営され、院内の重症患者対応と救急外来での救急車搬送患者（第3次救急患者）を対象に診療を行っている。診療実績として、救急車搬送台数は年間約3,300台以上、救急外来受診患者数は5,500人以上で、増加傾向にある。2012年10月よりドクターヘリ事業を開始し、新潟県全域を視野に入れた救急医療体制を行っている。当センターは、救急科専門医指定施設・指導医指定施設（日本救急医学会）、専門医研修施設（日本集中治療医学会）、認定施設（日本航空医療学会）、専門医認定研修施設（日本熱傷学会）である。	救急部研修では、ドクターヘリ及び救急車で救急外来に搬送される患者の初期対応を行い、チーム医療の一員として研修を行う。対象となる疾患は、心肺機能停止、多発外傷、急性心筋梗塞、急性呼吸不全、敗血症等の重症疾患から環境障害や急性薬物中毒、熱傷と多種に及ぶ。救急科入院となった患者は救命救急センターに入院となり、研修医は、指導医とともに患者を受け持つ。予定入院とは異なり、リアルタイムでトリアージ、診察、診断、治療を行うことで、救急患者に対する対応を学ぶことが出来る。さらに超音波検査、中心静脈穿刺、気管挿管等の手技も上級医・指導医のもとで学べる。また、救急部研修では研修医に当直を行ってもらう。救命救急センターには24時間体制で専従医師が待機しており、夜勤帯においても2名の上級医・指導医が当直している。従って、常に上級医・指導医のもとで研修が行え、的確な指導・アドバイスを受けることができる。午前8時30分に症例検討・回診を行い、問題点を積極的にディスカッションしている。毎週、テーマを決めて抄読会を行っている。

リハビリテーション科

診療科目：リハビリテーション	
診療科担当研修責任者名：川島 寛之（リハビリテーション科 科長） 診療科連絡先担当者名：木村 慎二（リハビリテーション科 病院教授）	連絡先：skimura@med.niigata-u.ac.jp
新臨床研修医指導実績：平成16年度：0人。17年度：0人。18年度：0人。19年度：1人。20年度：0人。21年度：0人。22年度：1人。 23年度：1人。24年度：2人。25年度：0人。26年度：2人。27年度：1人。28年度：1人。29年度：2人。 30年度：1人。令和元年度：5人。	
受入期間：1ヶ月以上	同時受け入れ可能数：1人
◇◇◇ 学会認定専門医数◇◇◇	
日本リハビリテーション医学会専門医2人、日本整形外科学会専門医2人	
◇◇◇ 学会認定指導医数◇◇◇	
日本リハビリテーション医学会指導医1人	
診療科の概説・特徴	診療科研修の特徴等
当リハビリテーション（以下、リハ）科は平成28年4月に開設し、実際の外来およびリハ診療は総合リハセンターで行われている。当センターは平成18年1月に、新病棟東館2階に移転し、施設面積は704m ² と広く、PT室、OT室がそれぞれ大きな1室になり、ST室は個室3室を備えている。リハスタッフは理学療法士（PT）13名、作業療法士（OT）5名、言語聴覚士（ST）5名、看護師4名、リハ医は5名（専従4名、兼任1名）である。その他にセンター内には摂食嚥下リハ部門（兼任歯科医5名）と呼吸リハ部門（兼任呼吸リハ担当内科医2名）があり、リハ医療の全般を行っている点が特徴である。年間の当センターでのリハ施行延べ人数は約5万3千名であり、その疾患は多岐にわたる。平成18年1月に日本リハ医学会研修施設に認定され、さらに平成26年4月からは、がんリハと心大血管リハも新たに開始している。	前期研修によって、各種疾患のリハビリテーション医療に対応可能で、かつ専門性の高いリハビリテーション診療を習得する目的に本コースでの研修を行う。これらの研修を通して、臨床の場での情報交換と生涯学習ができる体制を構築する。 リハビリテーション医学はQuality of life (QOL) の向上を目指すことが本質である。対象疾患は全ての診療科の疾患であるため、あらゆる疾患の概念、治療法を熟知することはもとより、リハビリテーション医学に特異的な診察、処方を熟知することが必要である。他院では経験することが難しい摂食嚥下リハビリ、呼吸リハについてもそれぞれの専門医の指導の下、研修することが可能である。さらには介護保険を含めた社会保障制度、家屋構造・社会福祉制度に関する情報の習得、ハンデキャップをお持ちの患者様への心理的アプローチなどの研修にも適している。

病理部

診療科目：病理組織診断、細胞診診断

診療科担当研修責任者名：味岡 洋一（第一病理教授）
診療科連絡先担当者名：梅津 哉（病理部副部長）

連絡先：umezu@med.niigata-u.ac.jp

新臨床研修医指導実績：平成16年度：0人。17年度：0人。18年度：0人。19年度：2人。20年度：3人。21年度：1人。22年度：3人。
23年度：0人。24年度：3人。25年度：1人。26年度：1人。27年度：2人。28年度：0人。29年度：0人。
30年度：1人。令和元年度：2人。

受入期間：2ヶ月以上

同時受け入れ可能数：2人以内

◇◇◇ 学会認定専門医数◇◇◇

病理専門医7人、細胞診専門医3人

◇◇◇ 学会認定指導医数◇◇◇

病理学会指導医数7人

診療科の概説・特徴

診療科研修の特徴等

病理部は中央診療部門の1つとして、各診療科の組織診段、細胞診断、術中迅速診断をおこなっています。診断業務においては病理部のみならず、医学部病理学関係講座、臓研究所、歯学部口腔病理学講座と連携し、対応しております。

また、解剖例も年間50例程行われ、十分な研修が積める体制です。

当科研修では、病理組織診断、細胞診診断、術中迅速診断を主体に予定しています。また、各科との検討会、解剖例のCPCにも参加します。

さらに病理標本の作製法や染色法なども研修できます。
幅広い臓器、疾患の研修に、病理部は適したものと思います。

血液浄化療法部

診療科目：腎臓内科、膠原病内科

診療科担当研修責任者名：成田 一衛（血液浄化療法部長）
診療科連絡先担当者名：山本 卓（血液浄化療法部副部長）

連絡先：yamamots@med.niigata-u.ac.jp

新臨床研修医指導実績：平成16年度：1人。17年度：1人。18年度：2人。19年度：2人。20年度：2人。21年度：2人。22年度：0人。
23年度：0人。24年度：0人。25年度：1人。26年度：0人。27年度：0人。28年度：0人。29年度：0人。
30年度：1人。令和元年度：2人。

受入期間：1ヶ月以上

同時受け入れ可能数：2人

◇◇◇ 学会認定専門医数◇◇◇

内科学会専門医11人、腎臓専門医11人、透析専門医8人

◇◇◇ 学会認定指導医数◇◇◇

内科学会専門医5人、腎臓専門医4人、透析専門医4人

診療科の概説・特徴

診療科研修の特徴等

独立した中央診療部の一部門として、院内における全ての血液浄化療法を担当しています。
ベッドは15床で、年間4,000–5,000例の血液浄化療法に使用されます。①維持血液浄化療法としては血液透析と血液濾過透析、②急性血液浄化として血液透析、持続血液濾過透析、血漿交換、ポリミキシンB固定化カラムを用いた血液吸着など、③特殊血液浄化として二段濾過血漿交換、リンパ球除去、顆粒球除去、抗アセチルコリン受容体抗体除去などをそれぞれ施行しています。対象患者は新生児から成人までであり、要請があればICUやNICUにスタッフが出張して治療を行います。腹膜透析は年間10–20例導入され、約30例が維持腹膜透析患者として通院しています。

研修内容は、1) 透析患者の全身管理、2) 各種血液浄化機器の設定、操作、3) 血液浄化に必要なアクセス手術、4) 血液透析・腹膜透析の導入と管理、5) 腎移植の術前・周術期・術後管理、6) 急性血液浄化療法の導入と管理などです。

腎臓病患者、とくに透析患者は心血管病、感染症、悪性腫瘍など種々の全身疾患のリスクが高く全身管理が必要となります。その中でも体液、電解質、貧血、骨ミネラル代謝異常など内科一般に必要なマネジメントが重要です。

腎・膠原病内科に入院中の腎臓病患者だけでなく他科入院中の透析患者の透析管理を行うことで、総合診療的な全身管理を習得できます。また腎不全患者のパスキュラーアクセスの手術、中心静脈カテーテル留置、カテーテルインテーションなど専門的な技術を習得することができます。

腎臓内科はもちろん、総合診療に興味のある研修医の参加を歓迎します。

医科総合診療部

診療科目：総合診療、内科、地域医療

診療科担当研修責任者名：長谷川 隆志（医科総合診療部准教授）
診療科連絡先担当者名：馬場 真弘（医科総合診療部助教授）

連絡先：ababa.6215@wing.ocn.ne.jp

新臨床研修医指導実績：平成16年度：0人。17年度：2人。18年度：1人。19年度：1人。20年度：2人。21年度：1人。22年度：2人。
23年度：3人。24年度：2人。25年度：2人。26年度：2人。27年度：0人。28年度：0人。29年度：0人。
30年度：0人。令和元年度：1人。

受入期間：1ヶ月以上

同時受け入れ可能数：2人以内

◇◇◇ 学会認定専門医数◇◇◇

内科学会専門医3人、呼吸器学会専門医2人、アレルギー学会専門医1人、感染症学会専門医1人、気管支鏡専門医1人、腎臓専門医1人、透析専門医1人、整形外科学会認定リウマチ医1人、小児科学会専門医1人、糖尿病学会専門医1人

◇◇◇ 学会認定指導医数◇◇◇

呼吸器学会指導医2人、アレルギー学会指導医1人、感染症学会指導医1人、気管支鏡指導医1人

診療科の概説・特徴

近年、高度専門医療が求められる一方で、患者中心の全人の医療を提供することが強く期待され、平成13年に院内指置として総合診療部は開設された。平成14年度に文部科学省に新設が認可され、初代教授として本学呼吸器・感染症内科、腎・膠原病内科（旧第二内科）出身の鈴木栄一が就任した。地域医療学講座および医師キャリア支援センターのスタッフも加わり、地域医療などにも対応できる広範囲の総合診療のトレーニングが可能となっている。

診療科研修の特徴等

当科研修は選択科目であり、研修時期としては研修の2年目に行うこととなる。最大の特徴は、外来をファーストタッチから行うことである。医科総合診療部を訪れる多岐な訴えを主訴とする患者さんを初診の医療面接からはじまり、身体診察、各種検査のオーダー、投薬治療など全て行う。また、これらの患者さんの再来時の応対、検査結果の説明も行うこととなる。外来診療時は、常に指導医が常駐し、その場で適切な指導をマンツーマンで行う。外来の新症例全てを検討する外来検討会を週一回設けており、自分の行った診療行為に対する指導、アドバイスとともに、上級医の外来診療行為の解説を受けることが可能であり、幅広い能力を身につけることができる。